

Eça de Queirós のロマン主義

— *Prosas Bárbaras* 『文学素描』におけるロマン主義的特徴とその思想 —

上 田 寿 美

〈Sumário〉

Este trabalho pretende examinar as características românticas e as ideias de Eça de Queirós na obra *Prosas Bárbaras*, uma antologia de textos queirosianos que contém contos, poesias, crónicas, cartas e memórias. Os textos de *Prosas Bárbaras* foram escritos por volta dos anos 1866 e 1877, anos em que o autor estava a começar a sua carreira literária. São textos de experiência estilística, cujas características românticas, cheias de expressões metafóricas e fantásticas, foram influenciadas por autores estrangeiros, e não por portugueses.

O carácter fantástico, que considero ser peculiar das obras românticas de Eça, é utilizado como meio de expressar as ideias do autor, cujos temas se concentram no panteísmo naturalista. As coisas personificadas, como o lume e a árvore, contam o mundo humano opressivo e o sistema da natureza sob o ponto de vista do monismo. Estas ideias podem ser as fundamentais em toda a obra eciana, embora a maneira de as expressar se diversifique ao longo dos anos. Em alguns textos já se pode pressentir o pensamento crítico da sociedade capitalista.

1. はじめに

19世紀ポルトガルの写実主義作家エッサ・デ・ケイロースの初期の作品集『文学素描』¹⁾は、エッサのロマン主義時代の作品がひとつにまとめられたもので、そのテーマや特徴には、ポルトガルロマン主義の特徴ではなく、フランスをはじめとする外国のロマン主義作家の影響が見られる。エッサの作品においてみられる思想について研究したサライヴァ²⁾は、『エッサ・デ・ケイロースの思想』*As Ideias de Eça de Queirós* (2000) のなかで、この作品集に見られる主要なテーマは自然主義であると述べている。ここで言う自然主義とは、写実主義期における、いわゆる科学理論をもとに作品が構想されるものとは全く別の汎神論的な観点からとらえた自然観のことである。また、この作品集の特徴は幻想性であり、当時のエッサの思想が空想的で非現実的なロマン主義的手法を通して描かれている。この作品集に収められた作品は、コインブラ大学を卒業したばかりの若きエッサが本格的に文壇の世界へと足を踏み入れる以前に書かれたものばかりで、文章表現の練習やとりとめもなく思いつく思索の試論的な意味合いが強いため若干一貫性に欠けるきらいがある。しかしながらそこにはすでに写実主義時代に開花するエッサの批判精神を彷彿とさせる表現や、晩年のエッサの作品にも見られる首尾一貫したある人生観など、後の作品の特徴を表わす重要な兆しが見られる。

本稿では、まず、ポルトガルのロマン主義における一般的動向について述べ、エッサ・デ・ケイロースの作品、特に『文学素描』に見られるロマン主義の特徴を検証する。なかでもエッサ特有の幻想的表現に着目し、幻想を用いた表現とその思想について考察し、続いて後の作品におけるエッサ・デ・ケイロースの独自の作風や思想との関連性について検証していく。

2. ポルトガルのロマン主義

『文学素描』は、エッサの死後、友人のジャイメ・バターリャ・レイス³⁾により1903年に出版された作品で、コインブラ大学法学部を卒業後、弁護士業のかたわらガゼッタ・デ・ポルトガル紙⁴⁾などで1866年から1867年にかけて掲載された、短編小説、叙情詩、随筆、書簡、回想録など様々なジャンルの作品が18作品収められている。当時のポルトガルの文壇では、1865年にロマン主義第二世代に対してフランス写実主義に影響を受けたコインブラ大学の学生が始めた論争、いわゆるコインブラ問題の勃発により写実主義が世に知られることとなる。実際ポルトガルで写実主義が広く認められるようになるのは、1871年のリスボンカジノ連続講演会⁵⁾以降のことであって、文壇の主流は依然ロマン主義が占めていた。コインブラ問題でアンテロー・デ・ケントアル⁶⁾と同様にロマン主義を批判した作家テオフィロ・ブラーガ⁷⁾は、当時のロマン主義文学は、「中世に集約された歴史の偽装」であるとし、過剰なまでの感情表現と非現実的で空想により歪曲された中世の歴史的テーマが好んで用いられ、この時代の作品には、不幸な愛や、サウダーデ、不吉さ、憂鬱、孤独、悲しみ、中世主義、歴史主義といったモチーフが、比喩的表現を用いて表わされていたと述べている。一方、同じ頃、ガゼッタ・デ・ポルトガル紙の文芸欄に発表されたエッサの作品には、ポルトガルロマン主義の影響はほとんど見られず、おもにフランスやドイツなど、外国のロマン主義作家からの影響を強く受けている⁸⁾。レイスは『文学素描』の序文のなかでエッサが影響を受けたのはハイネ、ネルヴァル、ミシュレ、ボードレール、そして間接的にシェークスピア、ゲーテ、ホフマン、ポーであるとし、なかでもヴィクトール・ユゴーだったと述べている。ロマン主義第二世代の作家たちがこぞってそのテーマに中世の歴史を扱ったことにたいし、エッサの作品にみられるテーマは、ユゴーやミシュレらに影響を受けた汎神論的自然主義が大半であるいっぽうで、田園主義、反ブルジョアジー、反資本主義、反物質主義、自由主義といった多岐にわたるテーマが扱われている。こうしたテーマは当時のポルトガルのロマン主義作家のなかでとりあげられることはなく、エッサと当時のポルトガルロマン主義とは一線を画していたことが分かる。

3. エッサのロマン主義と幻想文学

『文学素描』では、作品中に含まれる『手紙』⁹⁾という、友人カルロス・マイエール¹⁰⁾へ宛てた書簡形式の作品のなかで、学生時代を振り返り次のように述べている。

あの当時、聖書の作法にならい、ロマン主義は我々の魂の中にあった。熱心にもシェークスピアの胸像の前で祈りを捧げていたものだ¹¹⁾。

ここには学生時代のエッサがロマン主義文学に傾倒していたことが伺われ、実際、作品中においても比喩的表現や自由に対するあこがれ、恋愛のテーマ、空想主義など、ロマン主義の特徴が様々な形で表現されている。サライヴァ（2001）はこの作品集の主要なロマン主義的特徴について、エッサがフランス語訳を通して読んだドイツのロマン主義文学に影響をうけた幻想（空想）文学がその源泉である¹²⁾と述べている。幻想文学というジャンルは、ドイツのホフマンらにより始まり、フランスロマン主義で流行したジャンルで¹³⁾、その定義には諸説あるが、ツヴェタン・トドロフは著書『幻想文学論序説』（2013）¹⁴⁾のなかで、幻想という現象について「幻想とは、自然の法則しか知らぬ者が、超自然と思える出来事に直面して感じる「ためらい」のことなのである」と述べている。また、数々の幻想文学に関する理論を比較検討したスタインメッツ¹⁵⁾（1993）によると、トドロフによる定義は、構造主義的な観点から捉えられたものであり、あくまで心的な反応に基礎をおいているもので、「幻想」をためらいという短い時間にのみ限定することは出来ないとも述べている。スタインメッツは幻想文学を明確に定義するに至ってはいないが、「幻想」という言葉の語源について詳細に調べている。それによると、この言葉は怪奇現象や幽霊が現れるという意味のギリシャ語の動詞にさかのぼり、そこからフランス語の古語の形容詞の「常軌を逸した」という表現が現れ、19世ではさらに「架空の」「想像によってしか存在しない」などの意味が加わるとし、スタインメッツはこれらをまとめて、「幻想」とは想像力あるいは想像力の行き過ぎにかかわる精神の在り方を表わすもので、現実などのすべて狂った想像力や、混乱した精神から生じたものであるとしている。また、幻想文学という言葉が文学表現のひとつのジャンルを指す言葉として表れたのは19世紀前半のホフマン以降のことで、このジャンルでは、超自然が重要な役割を果たすと述べ、またその典型的要素として悪魔や亡霊、吸血鬼、怪物といった超自然的なモチーフが多く、幻想文学のジャンルにあらわるとされる。こうしたことから、幻想文学においては、超自然的な要素や想像や空想的な要素が含まれるものであると考えることができる。実際、『文学素描』のなかにも、悪魔を主人公にしたものや、ゲーテのファウストなど、ドイツのファウスト伝説にみられるメフィストフェレス（欲望を叶えるかわりに魂を奪うという人間との契約を交わす悪魔）についての随筆や亡霊が登場する作品が存在する。

こうした要素に加えて、ジャン・ベルマン＝ノエルは幻想文学のジャンルをテキストとしての特性のひとつであるとしている。文学的「幻想」には即時性がなく、「事後」に機能するものであり、語り手という媒体を通してより真実味を与えるための〈幻想〉とは語りの手法のひとつであると考えられる。他人の話の引用やテキストそのものをコメントするような中継としての語り手という媒体の存在が入ることで、「きわめて真実なもの、いまだ聞いたこともないもの、普通は聞くことができないものをわれわれに受け入れさせるために、偽りの真実らしさを操っている」と

し、語り手を通して伝えられる物語の構造にも注目している。

3.1. 『文学素描』における幻想

『文学素描』では様々な手法を用いた幻想的物語が描かれており、すでに述べたような超自然的要素が用いられた作品には、悪魔や、ドイツのファウスト伝説にみられるメフィストフェレスについての随筆や亡霊が登場する作品がある。また、かたりの手法により物語の構造からその幻想性を引き出す作品の例として、短編「炎」¹⁶⁾と「ある絞首刑台の記憶」¹⁷⁾の例を見ていく。

さて、冬にもなると野原の夜は厳しく攻撃的だ。あらゆる自然が無感覚で麻痺し、樹液の沸き立つ激しい興奮を待っている。木々はむき出しで、哀れに懇願するような両腕を掲げている。そして秋にはおとなしく生気を失い、五月にはラテン語の田園詩のリズムのように調子のよい澄んだせせらぎを奏でる水も、今では復讐に燃えた邪悪な声をあげる。風はカトリックの祈りの歌声のように囁かれてゆったりとしている。雨は頭上から、まるで勝ち誇ったけたたましい嘲りのごとく落ちてくる。

時折、月明かりが姿を見せる。それは、穏やかに魂を蝕む磁力を帯びた霧が消え失せた、オパール色をした無垢な月ではなく、金属的で冷たい鉛色をした月で、カトリックの伝説にある亡骸の表情のようだ。

その時ひとは、自らの卑小で無意味な魂が、静かに、まるで風の中の難破船のように嫌悪に満たされるのを感じ、暖炉のなかの炭火の炎の慰めてくれるような親密さと本能的に調和していく。そして生命の力が滑らかなまどろみに溶け、ひとは足下に小さく、陽気で、落ち着きのないはっきりとした声を感じ、その声は俗っぽい陶酔に浸っているようにひとに話しかける。

「私だ」とその声は言う。「私は、お前の古い同士、善良な炎だ。私は、かつてのお前の神秘的な神だ。(…)」
(*O Lume*, p. 239)¹⁸⁾

この物語は物語世界外に位置する語り手による比喩表現がふんだんに用いられた冬の夜の描写から始まり、語り手の視点は自然の描写から人間がまどろむ足下の暖炉から燃えさかる炎へと移る。その炎が人間に語りかけることで語り手が交替し、炎を語り手とする二次的物語へと突入する。一次的物語の語り手により自然の描写が空想に満ちた比喩的表現を用いてなされ、次第にその幻想的雰囲気が高められるなか、物語世界外に位置する一次物語の語り手の視線のさきにある炎が二次的物語の語り手として語り始める。炎自ら体験してきた人類と炎の長い歴史について語り始めるという一見非現実的な状況は、こうした語り手の視線が次の語り手に移ることでスムーズに移行し、偽りの真実らしさが成立する。

また「ある絞首台の記憶」では、間接的な語り手の段階で超自然的現象を認めることで、明らかに非現実的な物語にある種の真実味が加わっている。

私がこの文書の存在を知ったのは、ある超自然的な方法によるものだった。それは朽ち果て黒ずんだある哀れな絞首台の身の上話について何か語られたもので、この絞首台が自らの悲惨な「記憶」について書こうと試みたものだった。それは、人生についての深刻な記録だったはずだ。木より他に自然の謎について詳しく知るものはいなかった。絞首台ほどに、人間についてより理解していたものはいなかった。縄の先で身をよじる人間ほど自然で真のものはない。——ただし、その背中に背負うものを除いてのことだが！ 残念なことに、その哀れな絞首台は朽ちて死んでしまった。

彼の残した手記のうち、あまり完全なものではないものが、私の書き写すこれらのものだ。——それは苦しみや、本能的な叫びの得体の知れないものをまとめたものだ。その木が血にまみれた複雑な人生を書き残すことができたなら！ 広大な自然、山々、木々、そして水が人間を鈍感にする考えというものがどういうものなのか、我々が知る時がついにやって来たのだ。恐らくこの感情は、私にいつの日か、私が抱え込んでいる、「ある微粒子の回想録」や「イトスギの根の旅についての手記」といった文書をも出版させるに至るだろう。

私の書き写す部分はこう述べている——それはその「回想録」の序章に過ぎないのだが。

「私は、厳格で、強靱なオークの古い家系で、古代にはその枝からプラトンに思想を着想させたこともあった。」¹⁹⁾

(*Memórias de Uma Forca*, p. 271)

ある絞首台がその悲惨な一生について述べた手記を偶然に手に入れた語り手「私」が、この手記の一部を書き写すという一時的物語の枠組みのなかで、二次的物語の主人公である「絞首台」自らが語り手となってその一生を語る。この絞首台は、歴史ある由緒正しいオークの木の家系に属していたこと、物質主義で放蕩者の父の存在、そして次々と兄弟が舞台や棺桶にされる中、森を愛する心優しい木であったのに、人間の手により思いもかけず絞首台にさせたことについて語り、その衝撃と恐怖に苦しむが、絞首台となった現実を受け入れその役割を遂行し、多くの人々の様々な人生を見送りつつやがて自身も絞首台として老朽化し、朽ち果て微粒子となって母なる大地へと戻っていくという極めて非現実的な光景が淡々と語られていくが、一次物語の語り手が超自然的手段により手に入れた手記を書き写すという中継を置くことにより、絞首台の物語によりリアリティが加わるのが分かる。

3.2. 汎心論と汎神論

『文学素描』の作品では、作者の思想が幻想という手段を借りて様々な形であらわされる。たとえば前出の絞首台のようなモノなどが、生物・無生物にかかわらず擬人化され、人間のように世の中を見つめ、自らの務めを果たしたのちに死を迎え、朽ち果てて土に還って地中の微生物や植物の根から吸収され、姿を変えて永遠に輪廻転生を繰り返すという思想が、多くの作品に共通して見られる。

「こっけいな神秘主義」²⁰⁾では主人公である語り手が、田舎道を散歩し墓場を通り、宿屋へ向

かうというストーリーのなかで様々な光景が比喩的表現を用いて表わされる。散歩という現実的行動の中で目にする風景が、隠喩表現を用いて幻想的に描かれ、墓場の場面では埋葬された死後の肉体の行方についてのエッサ特有の超自然的な汎神論的世界観が展開される。

墓堀りとは、種をまく人だ。亡骸を蒔くのだ。わずかの希望も収穫の愛すらもない。一体だれがああ成長した植物を刈り取るのだろうか。共同墓地に身を投じた亡骸が、死の種が、天で、われわれが星であるところのその根っこの先端のみを目にする、神の穀物畑で開花するかどうかなんて知る由もない。しかし、そうではない。魂は死ぬ。亡骸は甦り巨大な物質の中へと消えていく。悪意や暗い懺悔、悪の傷があるのは魂の中であって、体は自由に、新たに、健全に墓穴の泥だらけの豊饒へと落ちていく。最期の寒さ、憎しみ、愛、悲しみ、憂鬱、望み、これらが皆戦いと人生に疲れはて、やってくる時、まるで敗北した剣闘士のように自然に向かってこう言う：「死にゆくものたちはお前に祝福をする！」

そして死ぬのだ。生命とその苦境は、自然の無感覚性のなかへ、永続的な静けさのなかへ、運命的で盲目的な力の中へと吸い込まれる。そして物質は空中を、大地をゆき、影のなかで柔らかくなり、明るい光線に生き生きとし、それは岩であり、森であり、急流であり、流れ、蒸気、ざわめき、動き、キューベレーの肉体の複雑な震えである：そして物質は宇宙の生命を、型のもとで原子の鼓動を感じ、心地よい明るみと牧草の香りに浸っているように感じられ、星の吸い込まれるような光へと駆りたてられ、地球の荒々しい動きに引きちぎられたように感じられる。物質にはその活力の厳かな意識がある。そしてこのように、おまえのその無感動には途方もない不安と燃えるような冷酷な生命と恐ろしい魂がある。ああ、恐るべき自然よ！²¹⁾

(*Misticismo Humorístico*, p. 167)

肉体は、微粒子となって自然界にとけ込み、植物の根や微生物へと吸収され、再び新たな生命となって形あるものや香りや空気として再誕し、永遠に生き続ける。こうした一元論的な汎神論がこの作品の他にも「ある絞首台の記憶」²²⁾、「傍注」²³⁾、「苦しみの連祷」²⁴⁾、「鳶」²⁵⁾などの作品に表されている。肉体は形を変えて永遠にとどまりつづける一方で、魂についての見解は様々で死後は消滅するか、あるいは、永遠に続くなど、この時代のエッサの魂についての考えは様々である。短編「死者」の中では自然そのものの宗教性をうたい、人間はキリストにではなく自然にこそ宗教を求めべきだとする。

「このように、慰めを求め、今は亡き愛する人に震え、過ぎ去った母性の胸の中で涙を流しに行くべきは自然の中だ。宗教を見出すべきなのは自然の中であって、イエスの身体に流れる謎めいたホスチアにではない。オレンジの花に見出すべきなのだ。」²⁶⁾ (*Prosas Bárbaras*, p. 117)

宗教や神を自然の中に見出す一方で、カトリック教徒である作者自身イエス・キリストの存在

についてどのように捉えていたのだろうか。エッサは超自然的な存在としてのキリスト像にたいし否定的な見解を持ち、キリストの存在を歴史的な観点から捉えることに関心を持っていたことが、「鳶」や「キリストの死」²⁷⁾において分かる²⁸⁾。実在した人物としてキリストを捉える観点が実証的な分析が重視され始めた当時のヨーロッパにおいて流行していたように、キリストは一人の同胞愛に満ちた人間として描かれている。こうした考えがのちの小説『アマーロ神父の罪』等での教権主義や『聖遺物』における狂信的な信者についての批判的な見解にも影響を及ぼしていると考えられる。

これらの汎神論的な思想は、サライヴァ（2001）によると、おもにフランスの作家ユゴーやミシュレから影響を受けたものと考えられるが、それらの作家の汎神論においては人間中心主義、進歩主義的思想がその根底にある一方で、エッサの自然中心的な汎神論において人間はあくまで自然の一部であり、全てのものは等しく自然から誕生し、死後は再び自然のもとに1つになるという思想に一貫している。「死者」の中で、イエス・キリストも裏切り者ユダも死後は自然に還り、同じ物質として1つになったと述べているように、権力や宗教などこの世のしがらみなどは何の意味もなく、全てを飲み込み新たな形として再生させる自然の偉大さを表わしている。

また、伝統的価値観にみられる肉体=悪、魂=善という構造はエッサの汎神論にはなく、肉体は永遠に姿を変えて再生しつづける一方で、作品によって魂は死とともに消失する場合と、永遠に存在する場合とがあり、エッサ独自の汎神論には未完成で曖昧な部分が残されている。

またこれらの汎神論的自然主義と対立する概念として資本主義や商業主義、ブルジョアジーを挙げ、それらにたいする否定的な見解を述べる。19世紀に実際にリスボンに停泊したアメリカの大艦隊マイアントノーモについての随筆「マイアントノーモ」²⁹⁾では、急速に発展を遂げるアメリカ経済の商業主義の象徴としてこの艦隊が批判的に描かれている。経済大国となったアメリカ社会を「産業的封建制度」と称し、私腹を肥やすブルジョアジーとは対照的に貧しさを増す貧困層との間に大きくバランスを崩す社会の仕組みを批判するが、社会格差に対するマルクス主義的な批判ではない。産業的封建制度によって過剰になった人類の富への執着や野心、果てしない願望に起因する精神病や道徳的価値観の崩壊への危機感を表したものであり、社会の仕組みに対する批判というよりは人間そのものに対する警告としての要素が強い。またここで挙げられるブルジョアジーについては経済第一とする物質主義に固執し、エッサが理想とする自然と共存する人間の姿からはかけ離れた存在として扱われている。こうしたブルジョアジーの姿については1870年代より始まる写実主義について批判の対象として大きく取り上げられることになる。

4. お わ り に

以上、『文学素描』では、その大半の作品においてロマン主義文学特有の比喩や隠喩が豊富に用いられた描写によって空想的に表され、あらゆる生物・物質が語り手となって作者の主張が幻想的に描かれている。また幻想的な雰囲気の中かで生物、物質ともに姿を変えて永遠に生き続け、

自然という巨大なサイクルの中で全ては同じ宇宙の粒子の1つであり平等な存在であるというエッサ独自の自然を主体とする汎神論的な世界観あるいは宇宙観ともいうべき思想が展開されていく。また、それぞれの作品において語られる内容には、いずれも作者の思想が反映され、人間の横暴さに対する自然からの訴えなど、その幻想的な表現方法とはうらはらに非常に現実的な批判の込められた内容である。これらの思想は、のちの写実主義作品においてさらに発展し、『マイア家の人々』³⁰⁾では、主人公の友人が構想する「ある原子の記憶」³¹⁾として表わされるなど、また物質主義や資本主義への否定的見解やブルジョアジーの批判など、晩年の作品『都会と山国』³²⁾においても共通する思想である。そしてロマン主義の真骨頂とも言える幻想文学の手法は、1880年に出版される『大官を殺せ』³³⁾などにおいて再び用いられることとなる。

エッサがコインブラ大学時代に培った文学的素養が凝縮された作品集『文学素描』は、後のエッサの作品の根底に流れる思想や文学的な手法における基本的な要素を含み、ケイロース文学の礎となる作品集であると言える。

注

- 1) *Prosas Bárbaras*
- 2) SARAIVA (2000), p. 84
- 3) Jaime Batalha Reis (1847-1935), 作家, 外交官。
- 4) *Gazeta de Portugal*
- 5) Conferências Democráticas do Casino Lisbonense: 1871年に開催された当時のポルトガルの知識人らによる連続講演会で、ポルトガル社会をとりまく様々な案件について議論がなされ、その中にエッサ・デ・ケイロースによるポルトガル文学についての講演会があった。
- 6) Antero de Quental (1842-1891) 写実主義を代表する作家, 詩人。
- 7) Braga, Teófilo, *Introdução e Teoria da História da Literatura Portuguesa*, Porto, p. 429 in *História Crítica da Literatura Portuguesa*, (1993), Editorial Verbo, p. 261, Lisboa.
- 8) SARAIVA (2000)
- 9) *Uma Carta*
- 10) Carlos Mayer (1846-1910), 医者, 19世紀末の知識人のグループ Vencidos da Vida のメンバー。
- 11) «Naqueles tempos, segundo a fórmula do Evangelho, o romantismo estava nas nossas almas. Faíamos devotamente oração diante do busto de Shakespeare.» (Queirós, *Prósas Bárbaras*)
- 12) «A característica dominante destes folhetins é uma certa fantasia que, inspirando-se principalmente em traços da literatura romântica alemã (por transmissão francesa), pouco se preocupa com a coerência judicativa geral, e por vezes com a própria proporção ou unidade de cada texto, mas atinge uma surpreendente novidade temática e estilística em relação às tímidas tradições românticas nacionais.» (SARAIVA 2000, p. 858)
- 13) 田中義宏 (1984) 「フランス幻想文学研究史概説」『仏文研究』<http://hdl.handle.net/2433/137678> (2015.8.10 入手)
- 14) トドロフ, ツヴェタン (三好郁朗訳) (2013) 『幻想文学論序説』東京創元社
- 15) スタインメツツ, ジャン=リュック (中島さおり訳) (1993) 『幻想文学』白水社
- 16) *O Lume*

17) *Memórias de Uma Força*

- 18) «Agora, no Inverno, no campo, as noites são ásperas e hostis. Toda a Natureza está impassível e entorpecida, esperando a fermentação violenta das seivas. As árvores erguem os braços nus, miseráveis e suplicantes. E as águas, que no Outono estava quietas e pálidas, e que em Maio faziam claras murmurações, tão melódicas como o ritmo de um idílio latino, têm agora vozes vingativas e más. O vento é rouco e lento como um canto católico de ofícios: as chuvas caem de cima, como escárnios triunfantes e ruidosos.

Às vezes vem a Lua—não aquela imaculada Lua cor de opala, donde se exala um nevoeiro magnético que faz a alma docemente, mas uma Lua metálica, fria e lívida, como a face dos corpos finados, nas lendas católicas.

Então o homem sente a sua pequenina e inútil alma afundar-se no tédio, silenciosamente, como um navio roto numa calmaria, e vai por instinto dar-se à intimidade consoladora da lareira, das brasas e do fogo. E enquanto a força vital se dissolve numa sonolência fluida, ele sente aos seus pés uma pequena voz, alegre, inquieta, clara, que lhe fala como num éxtase profano:

Sou eu, diz a voz, eu, o teu velho camarada, o bom lume. Sou eu, o teu velho Deus misterioso. Eu que te quero bem, e que me dei o que há em ti de grande e justo—a família e o trabalho. A minha história é triste, luminosa e terrível, imunda e meiga. Eu fui o teu companheiro das noites da Índia, o consolador e o purificador; eu fui o Moloch das religiões da velha África, ensanguentado e trágico: e sou agora o escravo a quem tu mandas mover as máquinas.» (*O lume*” in *Prosas Bárbaras*, p. 239)

- 19) «Foi por um modo sobrenatural que eu tive conhecimento deste papel, onde uma pobre força, apodrecida e negra, dizia alguma coisa da sua história, esta força intentava escrever as suas trágicas «Memórias». Deviam ser profundos documentos sobre a vida. Árvore, ninguém sabia tão bem o mistério da Natureza; força, ninguém conhecia melhor o Homem. Nenhum tão espontâneo e verdadeiro como o homem que se torce na ponta de uma corda—a não ser aquele que lhe carrega sobre os ombros! Infelizmente, a pobre força apodreceu e morreu.

Entre os apontamentos que deixou, os menos completos são estes que copio—resumo das suas dores, vaga aparência de gritos instintivos. Pudesse ela ter escrito a sua vida complexa cheia de sangue e de melancolia! É tempo de sabermos enfim qual é a opinião que a vasta Natureza, montes, árvores e águas, fazem do homem imperceptível. Talvez este sentimento me leve ainda algum dia a publicar papéis que guardo avaramente, e que são as «Memórias de Um Átomo» e os «Apontamentos de Viagem de Uma Raiz de Cipreste».

Diz assim o fragmento que eu copio—que é simplesmente o prólogo das «Memórias»:

«Sou de uma antiga família de carvalhos, raça austera e forte—que já na Antiguidade deixava cair dos seus ramos pensamentos para Platão.» (*Memórias de uma força*’ *Prosas Bárbaras*, p. 271)

20) *Misticismo Humorístico*

- 21) «O coveiro é um semeador. Semeia corpos. Sòmente não tem a esperança nem o amor das colheitas. Quem seifarà aquela plantação crescida? Quem sabe se os corpos que se atiram à vala, sementes fúnebres, se abrem, lá em cima, em searas divinas de que nós apenas vemos a ponta das raízes que são as estrelas? Mas não. A alma morre. O corpo revive e dissipa-se na matéria enorme.

É na alma que estão as más vontades, os negros remorsos, as lacerações do mal: o corpo desce livre, novo e são para as uberdades limosas das covas.

Quando chega o último frio, ódios, amores, tristezas, invejas, melancolias, desejos, todos cansados das lutas e da vida, dizem à Natureza como gladiadores vencidos: «Os que vão morrer

saúdam –te!» E morrem. A vida e o seu suplício é absorvida na insensibilidade da Natureza, no silêncio perpétuo, na força fatal e cega. E a matéria vai pelos ares, pelas planícies, amolece-se nas sombras, vivifica-se nos raios claros, é rochedo, floresta, torrente, fluido, vapor, ruído movimento, estremezimento confuso do corpo de Cibele: e a matéria sente a vida universal, a palpação do átomo debaixo da forma, sente-se banhada pelas claridades suaves e pelos cheiros dos fenos, sente-se impelida para a luz magnética dos astros, e dilacerada ásperos movimentos da terra. A matéria tem a consciência augusta da sua vitalidade. E assim, sob a tua impassibilidade, há uma angústia imensa, uma vida ardente, impiedosa, uma alma terrível, ó formidável Natureza!» (*Prosas Bárbaras*, p. 271)

22) *Notas Mariginais*

23) *A Ladainha da dor*

24) *Os Mortos*

25) *O Milhafre*

26) «Assim, é na Natureza que devemos ir procurar as consolações, estremezer com os amores mortos, chorar no seio das maternidades passadas. É na Natureza que se deve procurar a religião: não é nas hóstias místicas que anda o corpo de Jesus—é nas flores da laranjeiras.» (*Prosas Bárbaras*, p. 117)

27) *A Morte de Jesus*

28) «Mas considerado como homem, depois da sua qualidade divina, o Cristo histórico tem já nesta época uma extrema sedução para Eça.» (Saraiva 2000, p. 79)

「しかし神格としての立場の後に人間としてとらえられた歴史上のキリストという人物像については、この当時エッサにとってすでに大きな関心の的となっていたのである。」

29) *O Miantonomah*

30) *Os Maias*

31) *Memórias de Um Átomo*

32) *A Cidade e As Serras*

33) *O Mandarin*

参考文献

- BERRINI, Beatriz, (2000), *Eça de Queiroz Literatura e Arte Uma antologia*, Relógio D'Água, Lisboa.
- BRAGA, Teófilo, (1896), *Introdução e Teoria da História da Literatura Portuguesa*, p. 429, in *História Crítica da Literatura Portuguesa [Realismo] volume VI*, (1993), Editorial Verbo, Lisboa.
- BUESCU, Helena Carvalhão (ed.) (1997), *Dicionário do Romantismo Literário Português*, Editorial Caminho, Lisboa.
- FONSECA, Gondin da, (1970), *Eça de Queiroz – Sua vida e sua obra vistas sob novo aspecto, Uma biografia Pioneira*, Editor Borsoi, Rio de Janeiro.
- FRANÇA, José Augusto, (1993), *O Romantismo em Portugal*, Livros Horizonte, Lisboa.
- JUNIOR, António Salgado (1994), *A literatura nova (o Realismo como nova expressão da arte)*, in *História Crítica da Literatura Portuguesa (Realismo e Naturalismo)*, Editorial Verbo, Lisboa.
- MATOS, Alfredo Campos (1998), *Dicionário de Eça de Queiroz*, 2ª. Edição, Caminho, Lisboa.
- QUEIRÓS, Eça de (s.d.), *Prosas Bárbaras*, Livros do Brasil, Lisboa. (s.d.), *Obras de Eça de Queiroz*, volume III, Lello & Irmão, Porto.
- REIS, Carlos, (2009), *Eça de Queirós*, Edições70, Coimbra.
- REIS, Carlos (ed.) (1993), *História Crítica da Literatura Portuguesa [Romantismo]*, volume V.

- SARAIVA, António José (2000), *As Ideias de Eça de Queirós*, Gradiva, Lisboa.
- SEQUEIRA, Maria do Carmo Castelo Branco de (2002), *A Dimensão Fantástica na Obra de Eça de Queirós*, Campo das Letras Editores, S.A., Porto.
- ジュネット, ジェラルド (花輪光, 和泉涼一訳) (2004.10) 『物語のディスクール』(記号学的実践 ②) 水声社
- スタインメッツ, ジャン=リュック (中島さおり訳) (1993) 『幻想文学』白水社
- 田中義宏 (1984) 「フランス幻想文学研究史概説」『仏文研究』<http://hdl.handle.net/2433/137678> (2015.8.10 入手)
- トドロフ, ツヴェタン (三好郁朗訳) (2013) 『幻想文学論序説』東京創元社
- M・H・エイブラハム (水之江有一訳) (1967) 『鏡とランプ——ロマン主義理論と批評の伝統』研究社

